

優秀演題抄録

13 意味のある作業によって行動障害が軽減した事例 せん妄を合併した高齢認知症患者に対するアプローチ

【演者】吉岡 実穂 【所属】JA とりで総合医療センター

【共同演者】渡辺 真弓（作業療法士）

【キーワード】意味のある作業、行動障害、せん妄

【はじめに】

認知症患者に対し、本人にとって意味のある作業を提供した結果、行動障害が改善したため、報告する。

【事例紹介】

本報告に本人と家族の同意を得ている 80 歳代、男性。日常生活動作（以下 ADL）は自立し、農業に従事していた。数日前より意識障害、認知機能低下、歩行障害を認め、貧血、vitaminB1 欠乏、腰部脊柱管狭窄症の診断にて入院となり、入院 3 日目より作業療法（以下 OT）が開始された。入院後の MRI 検査にてアルツハイマー型認知症と診断された。

【評価】

JapanComaScale は I 桁だが、反応遅延や無反応を認めた。田植えや天気の話題にのみ反応が得られ、農業を自身の役割と捉える発言が聞かれた。改定長谷川式簡易知能スケール（以下 HDS-R）は 8/30 点、認知症状評価尺度（以下 GBS）は 81 点であった。下肢筋力低下による歩行時の動揺により、移動を伴う ADL は見守りを要した。夜間せん妄により、徘徊や他患のベッドに排尿しようとする、ベッド周囲にお茶を撒く等の行動障害を認めた上、病棟スタッフに行動を制止されることや身体拘束により易労性が亢進し、暴言・暴力を生じるようになった。自宅退院も視野に ADL 練習を実施したが、非協力的であった。

【方針】

26 日目に OT プログラムを再考し、日中の活動性の向上や生活リズムの獲得を目標に、事例が農業を役割と感じていることを踏まえ、園芸を導入した。また、見当識や記憶力の改善を目標に写真付きの日記を準備した。

【経過・結果】

導入時より発動性の向上を認め、自発的に草取りが行えた他、2 日目には前日の会話内容の想起が可能となった。4 日目には自ら担当セラピストを名前で呼ぶことができ、家族や病棟スタッフに日記を見せながら笑顔で会話をするようになった。また、植物への水やりの際に時間を気にする発言が聞かれ、見当識の改善が図れた。GBS は 49 点に改善し、行動障害は週 1 回程度に軽減した。22 日目に実施した HDS-R は 11 点に向上した。

【考察】

認知症患者が身体疾患の加療のために入院する場合、せん妄を併発することが予測され、日中の活動性低下はせん妄の発症を促進し、遷延化させる要因とされている。事例も入院による環境変化や活動性の低下がせん妄の誘因となり、見当識障害や不眠によって行動障害が生じたと考える。また、それらの行動障害による他者との良好なコミュニケーション機会の減少や身体拘束による混乱が、更なる行動障害の悪化に繋がったと考える。今回、事例が役割と認識していた農業という本人にとって意味のある作業を活用したことにより、活動性の向上のみでなく、役割や生活リズムの獲得を図れたと考える。また、日記を媒介としたコミュニケーション機会の増加や、植物への水やり等を通じた見当識の改善により、入院に伴う混乱は軽減し、行動障害の改善に繋がったと考える。